

East Asia Forum
8 August 2022

ペロシ訪台が米中黙約を破たんに

Pelosi's visit could derail US–China compromise over Taiwan

[https://www.eastasiaforum.org/2022/08/08/
pelosis-visit-could-derail-us-china-compromise-over-taiwan/](https://www.eastasiaforum.org/2022/08/08/pelosis-visit-could-derail-us-china-compromise-over-taiwan/)

Authors: Swaran Singh and Yves Tiberghien, UBC

2022年8月、第4次台湾海峡危機が訪れた。これについては、非難すべき点がたくさんある。

米国の極端な党派的政治は、自由主義的な国際秩序を危険な方向に導いてしまった。中国における国家主義的な政治は、外交政策において強硬な態度をとるようになった。そして、ソーシャルメディアの時代には、太平洋を越えて感情が沸騰している。

1972年にアメリカのキッシンジャー元国防顧問と中国の周恩来首相が合意した台湾の地位に関する「建設的なあいまいさ」(constructive ambiguity)という繊細な外交的妥協は、いまや修復不可能なほどのほころびを見せている。

私たちは、民主主義と国家主権という、相対立する原則に対し、イデオロギー的立場にもとづく攻撃が激化しているのを目撃している。

一般的な「一つの中国」政策をめぐる妥協は、1979年の米国台湾関係法その他の相互保証、さらに1998年の再評価によって補強された。

それは中国と西側諸国との外交関係の基礎となっている。

この微妙な均衡が崩れれば、世界秩序が損なわれ、緊張が高まり、紛争に発展する可能性がある。

その可能性は米国のナンシー・ペロシ下院議長の台湾訪問と、中国による大規模な軍事演習と外交上の威嚇という形で現実化され、この地域は揺り動かされている。

中国と海軍、空軍は、12 海里の領海には入っていないが、数え切れないほど海上境界線を侵犯している。ミサイルは台湾の近くや日本の排他的経済水域に着弾している。

中国は米国との外交ルートをほとんど絶ち、ASEAN 首脳会議も一度ならず二度までも欠席した。

アジア諸国の反応と懸念

アジア諸国はさまざまな形で懸念を表明している。

インドは不気味な沈黙で、東南アジア諸国は緊張緩和の緊急要請で。そして韓国は、ソウルを訪問したペロシを冷淡な歓迎で驚かせた。

日本は、ペロシ訪日を支持し、中国の危険な軍事的対応を非難する G7 コミュニケに加わった。

これは中国を激怒させた。予定されていた中国の王毅外相と日本の林芳正外相の会談は直前になってキャンセルされた。

安全弁なきエスカレート

米中両国は世界の2大経済・軍事大国である。それがはっきりした見通しや整備された防護柵もなしに、互いに応酬をエスカレートさせ続けるのは、憂慮すべきことだ。

両国の国内政治の現況は、硬直した価値観、人権を振りかざす人気取り、ケチのつけ合いにもとづいているようだ。このようなハイリスクな状況は、1914年夏の政治や1962年のキューバ・ミサイル危機を想起させる。

自制や融和によって安定化を追求する意欲も、欠点を指摘しようとする構えもない。そのような両国の雰囲気は、台湾の人々や周囲の国にとって、一歩間違えれば悲惨な事態を引き起こす可能性がある。

ペロシ氏はアジア諸国を歴訪したのだが、それは台湾訪問に関する様々な報道ですっかり影が薄くなってしまった。

米国のブリンケン国務長官は事前に「一つの中国」政策へのコミットメントに変わりはないと明らかにした。それにも関わらず、中国の王毅外相は「躁病的、無責任、非理性的」とこきおろした。

習近平国家主席が事前に警告していたように、中国は大規模な報復行動をとった。大砲による実弾射撃訓練を行い、事実上4日間にわたり台湾封鎖を実施し、台北への船舶と航空便を麻痺させた。

ペロシの隠密行動がもたらした混乱

ペロシの台湾訪問は、最初の極端な秘密主義とその後の報道機関へのリークがシリーズとなっていた。ペロシ事務所が発表した最初の声明では、台湾訪問については一切触れていない。

シンガポール、マレーシア、韓国、日本を訪問」し、「インド太平洋地域における相互安全保障、経済連携、民主的統治の確立」を目指すとされていた。その後、台湾からのメディアリークが増えていった。

このような経過の中で、シンガポールのリー・シェンロン首相は「地域の平和と安定のためには米中関係の安定が重要」であると発言し、従来の立場を再確認した。

いろいろな情報が交錯したが、台湾はカーニバルみたいな派手な歓迎をし、到着の様子がライブ配信された。台北 101 ビルには大規模なグリーティングが掲げられた。支持する者も抗議する者も、街中に溢れた。台湾立法院でペロシは、自由と民主主義のために戦う台湾への強い支持を表明した。

ペロシの台湾訪問がもたらした衝撃は、ソウルに立ち寄った際も強烈だった。

北京の好ましからぬ反応を察知した尹錫烈（ユン・ソクヨル）大統領は、休暇中であることを理由にペロシとの会談を見送った。彼はペロシのアジア歴訪で会談しなかった唯一の指導者になった。

尹大統領は親米派であるが、支持率が歴史的に低く、国民の離反が心配だったため、ペロシを歓迎する行動をとらなかったのである。ペロシがソウルに到着したとき、高官も議員も出迎えることはなかった。これを見た中国は、朴晋外相を中国に招き、韓国に報いた。

岸田文雄首相、細田博之衆院議長との会談でも台北訪問の余波が残っていた。中国のミサイルが日本の排他的経済水域に着弾し、王毅と林芳正の会談がキャンセルされた。

ペロシと中国が得点を稼ぎ、不信感を残した

結局、今回の騒動は米国中間選挙を前にしたナンシー・ペロシに、対中国強硬派の立場と筋金入りの民主主義者という立場を誇示する機会を与えたことになる。

いっぽう中国は、秋の党大会を前に、台湾の海域で増大する軍事力を示し、台湾への介入権を示す機会を得た。

しかし、予見された通りの旅は、太平洋における不信感、民族主義者のエスカレート、軍拡競争の新たなサイクルを解き放つことになった。

米国と中国は、より強固な情報交換のチャンネルを形成し、軍備管理体制を早急に刷新し、台湾に安定した平和のメカニズムを取り戻す必要がある。

Swaran Singh : ネルー大学 (ニューデリー) 国際学部教授、Association of Asia Scholars 代表。ブリティッシュコロンビア大学政治学部客員教授。

イヴ・ティベルギエン : ブリティッシュ・コロンビア大学政治学部教授、アジア研究所名誉所長。カナダ・アジア太平洋財団特別研究員